

教会における小集団活動とその信徒リーダー養成

— 聖書と歴史による一考察 —

尾形 守

教会が成長する上で、信徒がリードする小集団活動とその信徒リーダー訓練が重要であることを、聖書と歴史から考察しようとするのが、ここでの目的である。

日本の新興宗教の比較的多くが、小集団活動と信徒運動によって大きく躍進してきた。特に、創価学会の座談会、立正校成会の法座、また真如苑の家庭集會に顕著な例を見ることが出来る。個人主義の発達したアメリカでも、神学校でスモールグループの重要性が講義されていた。隣国の韓国の教会もまた、信徒が導く小集団活動によって大きく成長してきた教会が多い。

日本の教会が成長するために、小集団活動とそこでの信徒リーダー養成が重要ではないのかと思われ、聖書と歴史を概観してみることにしたのである。第一章では聖書から、第二章では歴史から、この問題が考察されている。

第一章 聖書における教会の小集団活動とその信徒リーダー養成

(1) 小集団活動

聖書から、小集団活動が教会の成長に有効である基本的な点を見ていきたい。最初の課題は、小集団活動と伝道との関係である。私達は、伝道を言葉の伝達、つまり、*kerygma* としてのみ考えがちである。しかし、伝道は聖書の言葉の宣言 (*Proclamation*) だけでなく、教会の共同体 (*Community*)、即ち *koinonia* の形成をもまた必要としている。コイノニア (*koinonia*) とケリグマ (*kerygma*) とは、伝道において互いに補い合う関係にあることがわかる。ピーター・ワグナーが伝道を次のように定義しているのは、注目に値する。

「伝道とは、イエス・キリストの弟子とすることである。聖霊の力を受けてイエス・キリストを提供することによって、男女がイエス・キリストを自らの救い主として信じ、キリストの教会の交わり (*Fellowship*) の中で、彼らの主としてキリストに仕えていくことである。」⁽¹⁾

言葉の伝達と信者の共同体の中でのフェローシップによる伝道は、イエスの宣教活動にもはっきりと見られた。イエスが公生涯を始めた時、彼はこう言った。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ四・一七)。イエスはペテロとアンデレに気づくと、彼らに言われたのだった。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」(マタイ四・一九)。イエスは言葉の伝達とともに、共同体の形成を通してそれらの言葉を肉付けしていったのである。ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人を核とした十二弟子が、イエスの宣教活動の中核となった。伝道旅行中、イエスは彼の弟子となった多くの人々を伴われた。弟子の数が最も多くなったのが、昇天の時

の約五百人であると言われる。

イエスはまた、宣教の方策 (Strategy) として民衆の家を用いられた。ジョン・マリソン (John Malison) は、次のように指摘している。

「個人の家の使用は、疑いもなくイエスの宣教方策の一つの発展であった。彼の公生涯の始めに、マルコが私達に告げていることは、イエスがユダヤ人会堂を出た後、彼は「ヤコブとヨハネを連れて、シモンとアンデレの家にはいられた」(マルコ一：二九) ということである。イエスがペテロの姑をいやした後、その家は、イエスが病人をいやすことができたため、その戸口のところが集まって来る全市の人々のための手術を行なう一つの基点になっていたように思える(使徒二：一)。この家は、彼の宣教活動に起こった幾つかの出来事の場所であったように見えるのである。」⁽²⁾

イエスは、罪人として知られた人々の家々に入って行かれ、積極的に彼らと交際されたのだった。イエスは彼らと親しく交わることによって、彼らを救いに導いていった。イエス自らコイノニア (Koinonia) の大切さを述べている。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるならそれによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」(ヨハネ一三：三四―三五)。イエスを中心とした友情関係 (Friendship) は、未信者をイエスの共同体に引き付ける力がある。ウィリアム・ケイン (William V. Cain) は言っている。

「伝道のための最も効果的な出発点は、クリスチャンのフェロシップを生み出すことである。主の民の中でイエス・キリストの愛が、人生を変革することができるイエスの力の確証である。イエスの伝道を評価する上で、『在る状態 (Being)』の強調に気づくのである。」⁽³⁾

パウロの宣教活動においてさえも、kerygma と小集団活動の両面を見ることが出来る。パウロの初期の伝道では、バルナバと一緒に旅をした。パウロはまた、ヨハネを助手として伴っていた(使徒の働き一三：五)。彼らは、異邦人の諸都市で働いていた。そこで彼らは福音を宣言し、弟子をつくり、クリスチャンの共同体を形作った。パウロは、教会の核となることができる信者の群を形成していったのである。彼はまた、教会ごとに長老を任命し、彼らに牧会を委譲したのだった。

初代教会のクリスチャン達は、教会の家を建てなかった。信者の家、賃借りした家、またはユダヤ人会堂が、集会の場所として選ばれた。ハトストーン (John W. Hurston) は言う。

「使徒の働きにおいては、ユダヤ人会堂にあたるギリシヤ語は“synagogue”で、約二十回出ている。……神殿 “temple” は約二十五回見られ、家での信者の礼拝や教育は九回言及している(二：二一―四、五―六；五：四二；一〇：二四―四八；一六：二五―三四、四〇；二〇：一七―二〇；二二：八一―四、二八；三〇―三一)。それ故、使徒の働きの中に、神殿やユダヤ人会堂での公式的構造と、家での形式ばらない構造との両面において礼拝や教えがなされていたのを見るのである。」⁽⁴⁾

モアー (William R. Mourer) は次のような見解を述べている。

「初代教会の交わりのためのこうした小集団の存在は、厳しい迫害下、信者が世に散らされた状況の中ではより重要な意味を持つようになっていった(使徒一八：一、四)。この点から、例えユダヤ人会堂が伝道目的のために依然用いられたとしても、家は地域における教会活動の拠点となっていたのである。」⁽⁵⁾

モアーはさらに次のように述べている。

「家は、聖餐式(使徒二：四六)、教育(五：四二)、伝道集会(一〇：二二)、祈禱会(二二：一二)、即座の伝道

の集い(一六:三二)、求道者のフォロトアップ(一八:二六)、夜中まで続く祈禱会や礼拝や教育(二〇:七)、クリスチャンの交わりの夕べ(二一:七)を含んだ様々な比較的小きな集いに使われていた。⁽⁶⁾

家々でのこうした小集団活動は、あらゆる地域における福音の土着化を刺激させたり、開拓伝道を助けたり、初代教会の成長を促したりしたのだった。

旧約聖書には、小集団に関する重要な見方がある。出エジプト記一八章で、モーセは彼のしゅうとイテロの助言を聞き入れて、「モーセは、イスラエル全体の中から力ある人々を選び、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として、民のかしらに任じた。いつもは彼らが民をさばき、むずかしい事件はモーセのところに持って来たが、小さな事件は、みな彼ら自身でさばいた」(出エジプト記一八:二五-二六)。この文脈では、スモールグループは組織や管理運営の円滑さに貢献している。ピーター・ワグナーは、教会の構造を次のように分けている……家族「The family」(核家族)、細胞集団「The cell」(八-十二人の小さな親しい分かち合いのグループ)、会衆「The congregation」(四〇-二〇〇人のフェローシップグループ)、祭典「The celebration」(礼拝における全教会員の集団)、祭り「The festival」(大きな大会、クルセード、キャンプ集会、式典集会)。⁽⁷⁾

これらのグループ分けは、モーセの場合と似通っている。教会成長のための組織の形成は、小集団からより大きな集団へのグループ分けを必要としている。教会成長のためには、大きな集団だけでは不十分であり、小集団だけでも不十分である。様々なサイズの集団が必要とされるのである。ここでは小集団を中心に見てきたが、大集団の組織化を目ざしながら小集団を考えていくことは大切なことである。

(2) 信徒リーダー

今まで聖書によって小集団活動の重要性を見てきた。ここからは、小集団を導く指導者について聖書から概観していききたい。

小集団を用いて伝道活動をしていく上で、信徒リーダーを訓練することがまず必要であることを述べておきたい。専門の牧師の数が限られているからである。もし牧師がすべての小集団を導こうとするなら、小集団の数が限られてくるだろうし、小集団による教会成長は妨げられるであろう。教会の建物の中だけでなく、あらゆる所に小集団活動を起こしていくには、信徒が小集団を導く必要がある。多くの牧師は、教会の建物に自らの活動を限定し、書齋に閉じ籠もる。しかし、信徒は未信者の真ただ中で働いている。そうした信徒こそが、いたる所で小集団のリーダーになるに相応しい。だが、日本の教会が牧師中心の牧会伝道が取られてきたので、信徒リーダーや信徒牧会者の領域はまだ弱い。聖書的には、すべてのクリスチャンが神の民であり、神のミニスター(Ministers)である。平信徒と聖職者という区別は、聖書的ではない。今日教会で使われている聖職者(Clergy)と平信徒(Laity)という用語は、聖書には見られない。「牧師」"Pastor"や「伝道者」"Evangelist"は、元々教会の職(Office)を意味していたのではない。これらは、神からの召命と霊的賜物に基づいた働きである。

「平信徒」という言葉は、ギリシャ語の *laos* から由来すると言われる。この *laos* の元の意味は、「神の民」、「神のしもべ」、「神の選ばれた民」である。旧約聖書では、*laos* は「神の民」であるイスラエルを意味していた。新約聖書に出てくる *laos* は、キリストに属する新しい民、すなわち「神の民」を意味している。新約聖書の神の民は、キリストを信じることによってあがなわれた人々である。彼らが教会を構成するのである(ローマ九:二五-二六; II コリント六:一四-一八; ヘブル八:一〇)。ホワイット(Sheldon R. White)によれば、「ヤールウエの民」や「神の民」という称号は、榮譽の称号だという。*laos* は、神の共同体で礼拝をしてきたし、礼拝しているのだから。

る。彼らは、教育のない者ではない。彼らは、生ける神を知っている民である。フィリッパ (Abraham Philip) は次のように指摘している。

「不幸にも、教会は一世紀の後すぐに新約聖書の基本的概念を失ってしまった。グレコ・ローマの政治的環境に影響されて、教会は民を二階級に分け始めた。「Kleros」(「Clergy」が派生してきた元の言葉) は、知恵を所有し、訓練された、行いに力がある人々となった。「Iaos」(「Taity」という言葉が派生してきた原語) は、訓練されていない、さしずめに盲従することが期待された人々となったのである。

英語の「Cleric」が派生してきたギリシャ語の「Kleros」は、教会の一つの職としては決して同一視できないのである。「Clergy」(聖職者) とか「Taity」(平信徒) という現在の用語に相当するものは、新約聖書の中には存在しないのである。今日多くの人が、教職者は熟練した者であるのに対して信徒は教会の事柄においては不器用な不適当な者という間違った理解をしている。⁹⁾

次に、私達はミニスター (Ministers) とリーダー (Leaders) の関係を見てみたい。エペソ四：一一―一三には次のように記してある。

「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師または教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。」

この聖句は、すべての神の民がミニストリー (Ministry) の働きに召されていることを示している。このミニストリーは、日本語では「奉仕」として訳されているが、ただの奉仕よりもっと専門的な力量を持った用語として見るることができる。また、ここで注目すべきことは、神はある人々をキリストの体の訓練者またはリーダーとして召しておられることである。これらの訓練者またはリーダーは、神の召しと霊的賜物によって承認されるのである。伝道者、牧師そして教師は、聖徒をミニストリーの働きのために整えるよう神によって選ばれた聖霊の器である。エペソ四章は、伝道者、牧師そして教師になるためには神の召しが必要であることが強調されている。ローマ一：二：五―八やIコリント一：二：二七―三一にはまた、霊的賜物としての預言や教えの賜物が出ている。それゆえ、伝道者や牧師そして教師の働きは、神からの召命と霊的賜物の両方によってある者に与えられる。これらは、職 (Office) としてではなく、神の民の体における機能 (Function) または役割 (Roles) として与えられている。Iテモテ五：一七には、「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。」とある。ここでは、牧師が長老として見なされている。長老は職としてよりも、教会内の機能や役割として聖書から見るることができる。このように、平信徒と聖職者という区別は聖書的ではない。むしろ、すべてのクリスチャンはキリストの体の一部分づつを構成しており、すべてのクリスチャンはミニスターであり、霊的賜物や召命に応じて働きが与えられているのである。また注意すべきことは、教会がイエスを信じる人々の群である以上、この組織にリーダーが必要であることだ。エペソ四章から見ても、伝道者、牧師そして教師の賜物と召命を与えられたクリスチャンが、教会全体の指導者になることがふさわしい。リーダーシップや管理の霊的賜物を持ったキリスト者もまた教会の指導的地位に立つことができるかもしれない。長老は聖書では教会のリーダーとして見なされていて、長老には二種類ある。第一のタイプは、神の言葉を教え、教会を指導する両方の働きに召されたミニスターである。第二のタイプは、教会を指導管理する働きに召されたミニスターである。Iテモテ三：一―七やIテトス一：五―九には、長老の資格が述べられている。神学校教育はこれらの資格の中には言及されていない。主に、

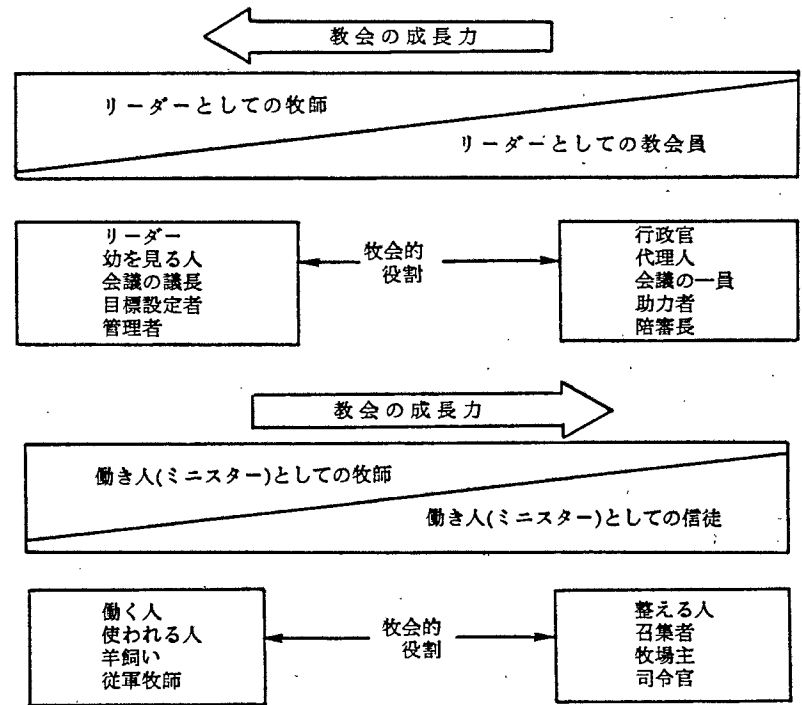
その人の信仰の質と評判が考慮されている。以上のように、聖書によれば、すべてのクリスチャンはミニスターであり、教会が組織である以上ある者達はリーダーとして立てられる。伝道

牧師そして教師の賜物と召命を持った人々が教会の訓練者としてのリーダーになることが求められている。

ピーター・ワグナーによると、教会の潜在能力は、牧師がリーダーとして働き、教会員がミニスターとして働く時より強力になると言っている。

以下の図がそのことを示している。教会成長のためには、牧師が大胆なビジョンのもとに強力なリーダーシップを発揮し、教会員はフォロアー (Follower) として従順にミニストリーの働きをしていくことがかぎである。

図1 教会の成長力



教会の組織では、トップリーダーの数は限られている。しかし、すべてのクリスチャンは伝道のためのミニストリーの働きに召されている。すべてのクリスチャンは証し人である(すべてが伝道者ではないが)。すべてのクリスチャンは福音を宣べ伝えるべき使命を持っている。伝道者、牧師そして教師というトップリーダーの指導のもとでの神の民の動員 (The mobilization of God's people) は、教会成長に大いに貢献することができるのである。

神の民が、伝道に、小集団活動に、開拓伝道に動員される時、神の民全員による信徒運動 (The lay movement) が起こるのである。新約聖書に見られる世界宣教のダイナミックな動きは、神の民全員による信徒運動と言うことができる。イエス・キリストの例を見るなら、彼は当時の宗教家階級には属していなかった。彼は庶民の一人として育ち、およそ三十歳で公の生涯に入られた。イエスの十二弟子は、無名の取税人や漁師たちであった。使徒パウロでさえも、彼の伝道活動の大部分は、使徒の特権を用いず、天幕職人 (Tentmaker) として働いたのだ。初代教会の発展を見るとき、ステパノを含んだ七人の執事的働き人のような信徒の貢献が非常に大きかった (使徒六：三―八)。ステパノの死後クリスチャンたちは迫害され各地に散らされたが、彼らはいたるところで積極的に伝道しキリスト教の発展に貢献したのである。ピリポはそうした人々の一人だった (使徒八：四―八、二六―四〇)。アンテオケ教会は、ステパノのことから起こった迫害によって散らされたキプロス人とクレネ人の幾人かの信徒によって開拓された (使徒一一：一九―二二)。プリスキラとアクラは天幕職人として働いていた信徒だが、伝道にたずさわっていた (使徒一八：二―三、三八)。彼らは自分の家を家の教会として開いていた (Iコリント一六：一九)。

使徒パウロは、使徒一四：二―二三で長老を任命している。これらの長老は信徒リーダーであった。聖書の文脈から、これらの長老は公式的な専門訓練を欠いていたように見える。だが、彼らは各地域教会で訓練されたのである。彼らは、パウロによって選ばれ按手を授けられたのであった。「長老」という用語は、前にも見たように、時々

牧師や教師の意味にも使われている（使徒二〇：一七―二〇、一テモテ五：一七、一ペテロ五：一―三）。初代教会では、長老は信徒リーダーによって代表されていたように見える（使徒一四：二一―二三）。今日、牧師は一般的に教会における専門職たる聖職者として見なされている。スナイダー (Howard A. Snyder) は次のように指摘している。

「初代教会の頃の牧師は、現在のプロテスタント教会に持ち込まれている高度に特種化され専門化された意味での牧師として提示されていない（新約聖書の他の個所でもそうである）。ヨハネ二一：一六、使徒二〇：二八、一ペテロ五：二には養われるべき群としての会衆の概念が見られるけれども、エペソ四：一一には明らかに、会衆のリーダーとしての新約聖書の意味での牧師という言葉が唯一登場している。このように、牧会的な職 (Pastoral office) としてではなく、単に牧会的な機能 (Pastoral function) として牧師はみるのである。」

聖書は、信徒運動とすべての信者のミニストリーを支持している。新約時代の教会成長は、信徒運動と直接的に関係していた。新約聖書には使徒的リーダーシップを見ることができ、同時に信徒運動が非常に発展していったことも事実である。今日、強力な牧師のリーダーシップと同時に信徒運動が強調される必要がある。

(3) 信徒リーダー訓練

イエス・キリストのリーダー訓練の型は、模倣式モデル (Imitation models) と徒弟式モデル (Apprenticeship models) を含んでいた。ロバート・クリントン (Robert Clinton) は言う。

「模倣式モデル (Imitation models) は、学びの拠り所として教会内の役割モデル (The role models) を利用することによって、訓練を受ける人が自分に直接関係づけられた実際の働きによる訓練 (On-the-job training) を持つことによって、地域教会のレベルで通常なされる自己訓練を意味する。普通、その学びは非常に非公式的なものである認められた見習期間 (Apprenticeship) またはインターン期間 (Internship) を含むでない。役割モデルは、模倣式モデルがなされていることにはしばしば気が付かないことがある。」

徒弟式訓練モデル (An apprenticeship training model) は、実際のミニストリーの文脈において、主人と呼ばれる教師が弟子と呼ばれる学び手に、姿勢や知識や技術を分け与える、奉仕の過程での訓練を意味している。具体的には、

- * 望まれる姿勢や知識や技術をモデル化することによって
- * 姿勢や知識や技術に関して教示や説明をすることによって
- * 弟子による練習を要求することによって
- * 弟子が望まれる方法において主人に匹敵するくらいになるまで、弟子を評価したり正したりすることによって

イエス・キリストは、約三年半の間、弟子たちと生活することによって彼らを訓練した。イエスの弟子たちは、彼の行動や言葉からじかに学んでいた。新約聖書の存在は、弟子たちがイエスが伝道中に語った言葉を綿密に記録していた事実をものごといている。弟子たちはまた、イエスの行動パターンを模倣する機会をもっていた。こうしたリーダーシップ訓練は、模倣式モデル (Imitation models) を例示しているようである。

また、弟子たちと教師との関係では、イエスは積極的に徒弟式モデル (An apprenticeship model) によって弟子たちを訓練した。イエス・キリストは、自らの行動と言葉でもって、どのように祈るか (マタイ六：八―一三) またどのように伝道するか (マタイ一〇：五一―四二) を弟子たちに教えられた。イエスは、リーダーになるための心の姿勢

(マタイ二〇：二五—二八)を、またリーダーになるための必要なこと全てを間もなく分かち与えられたのだった。パウロの伝道にも、模倣式モデルと徒弟式モデルが見られる。クラレンス・リム (Clarence Lim) は次のように述べている。

「パウロの模倣に関する言及や、彼自身の模範への言及の御言葉としては、Iテサロニケ一：六—七、IIテサロニケ三：七—九、Iコリント四：一六や一一：一、ピリピ三：一七や四：九、ガラテヤ四：一二、Iテモテ一：一六、IIテモテ一：一三、三：一〇そして使徒二〇：三五に見出せる。」¹⁴

徒弟式モデルがまた、パウロの伝道活動の中に見られた。IIテモテ二：一一—二において、パウロはテモテを子と呼んでおり、自らをテモテの父の位置に置いている。父が自分の子を訓練するように、パウロはテモテを訓練したのである。テモテ自身も、彼が導いたクリスチャン達をパウロがしたと同じように他の者を訓練することができるようなリーダーに育て上げていくのだった。

以上のような指導者訓練方法は、小集団の信徒リーダーを養成する上で助けとなるであろう。主イエスやパウロのように、牧師が最初模倣式モデルや徒弟式モデルでもってある信徒を小集団のリーダーとして訓練し、やがてその信徒リーダーが他の信徒と同じ訓練方式で訓練していくなら、小集団の信徒リーダーは倍加していくのである。その訓練方法は日本に昔からある親分子分の関係を通したやり方に似ている。つまり、すべての信徒が導いてくれた人になり、また自らも未信者を信仰に導くことによって親となり、家庭集会のような小集団活動を通して自分の導きの子が親になりまた成長するように訓練するねずみ講式弟子訓練に似通っているのである。

第二章 キリスト教史における小集団活動とその信徒リーダー養成

前の章では、聖書の立場から小集団活動とその信徒リーダー養成の重要性を見てきた。この章では、キリスト教史の観点から小集団活動とその信徒リーダー養成の大切さを見ていきたい。また、ジョン・ウエスレー (John Wesley) の小集団活動とその信徒リーダー養成にも言及していきたい。

(1) 小集団活動、信徒運動、そして信徒リーダー養成に関する歴史的概観

使徒教会 (The apostolic church) の時代の後、小集団活動は初期の修道院に見られた。初期の修道院生活は、信徒運動であった。修道院の小集団活動に関しては、鷹取師が次のように言及している。

「三世紀終わり頃に禁欲的な改革者たちは、寂しい場所に霊的な完全さを求めた。次第にこうした修道士たちのあつた人々は、もし彼らが小さな共同体の中に結束するならば、実際的には益だけでなく霊的な益をも得るものであることを発見していったのである。その時から多くの小さな信者の共同体が生まれ、これらの細胞集団はある規則によって統制されたより厳しい訓練が要求される共同体へと徐々に発展していった。この発展過程は、西暦五二九年にモンテカシーノ (Monte Cassino) で、後の中世の多くの修道院改革運動の原型となったヌルシアのベネディクト (Benedict of Nursia) の修道院設立となつてその頂点となつた。」¹⁵

中世の信徒運動としては、カタリ派 (Cathari)、十二世紀初期の信徒運動 (エトレピトのタンケルム [Tanchelm of Utrecht]、ブルイズのペテロ [Peter of Bruys]、ローザンヌのヘンリー [Henry of Lausanne]、フラーシヤの

アーノルド (Arnold of Brescia)、『ワルダー派 (Waldensians)』、ローラードのウイックリフ (Wycliffe of Lollards) があげられる。また、フランシスコ修道会 (Franciscans) のような托鉢修道会 (Friars) は信徒運動の一部として見なすことができる。

宗教改革は、信徒運動を復興する好機であった。宗教改革のスローガンが、「万人祭司制」であったからである。しかし、宗教改革によって生まれたプロテスタント教会は、宗教改革の精神の大方を失ってしまった。新教は聖職者と平信徒という二階級を持ってしまった。カトリック教会は祭司と平信徒という区別をしたが、プロテスタント教会もまたこの流儀を真似たのだった。プロテスタント教会のこの傾向は、牧師が教会の仕事の全てをなし、平信徒はお客様のように振る舞うというものであった。

宗教改革時代の小集団活動に関しては、ルター自身は彼のビジョンの実現のために小集団を形成したわけではなかった。しかし、スイスの宗教改革者の一人であるマルチン・ブザー (Martin Bucer) は、十六世紀後半に小集団を用いた。多分、彼の影響によって、英国で清教徒たちがこの方法を採用した。

宗教改革は、信者全体を包含する多くの修道院的な共同体を生んだのだった。メノナイト派 (メノ一派) は、實際上地理的に分離した共同体であったが、囲いが取り外された信者の村をも含んでいた。信者どうしが身近に生活していたので、分かち合いの交わりを通して大いに祝福を受けた。ただ私有財産を放棄したわけではなかった。¹⁰⁾ プロテスタント史が物語っていることは、宗教改革によって覚醒された信徒運動は、宗教改革後年々弱まっていたことだった。しかし、プロテスタント教会に起こったある運動は、信徒運動と小集団活動を通して大きく成長していった。

清教徒運動は、英国国教内に起こった。エリザベス朝時代に、清教徒たちは多くの地域に細胞集団 (Cell groups) を形成した。信徒がそこで牧師と一緒にあって説教や諸活動に参加した。こうした信徒集団のある者たちは、相互に訓練を課していった。チャールズ・ハムブリック・ストウエ (Charles E. Hambrick-Stowe) は、清教徒運動の中に見られる小集団と信徒運動との組み合わせを次のように述べている。

「毎週一回、隔週毎、または毎月一回開かれる家での私的集会 (Private meetings) は、始めからニューイングランド宗教生活の一部であった。それらはまた、『相談の会 (Conference meeting)』とか『相談の社会 (Society of conference)』として言及されている。それらの大きな人気と潜在力は、ハッチソン (Hutchinson) が見出したように、霊的リーダーシップのためのひとつの効果的な媒介であった。その実践が、家庭集会 (Home meetings) が迫害下清教徒の唯一の礼拝の手段であることがしばしばであった英国、また家庭集会が清教徒運動中の信徒の力の一つの表現であった英国からもたらされたのだった。私的集会には、信徒が御言葉を解きあかし、祈り、互いにカウンセリグしあう機会があった。私的集会では、信徒は牧師が聖日したことを週日にすることができた。」¹¹⁾

ハンブリック・ストウエはまた、シェパード (Shepherd) を引用することによって清教徒運動における私的集会の特徴を指摘している。

「シェパードは、聖霊のためのくたとして私的集会が行うことのできた六つの特別な方法をあげている。(1) クリスチャンが「互いに愛し合うこと」を表現できる小集団であった。(2) 私的集会は祈りの共同体であり、それは教会の一部として教会のために熱心に祈りを実践する場であった。(3) 時に適った勧めによって、その集会の信徒リーダーが福音をそのメンバーの必要に適用していくことができた。(4) 会員は機会さえあれば互いに教えたり指図したりする機会があった。(5) その集会は、悲しみの中にある人々を慰めるための神の恵みの手段であった。(6) 私的集会は、そのメンバーがいかに信仰や霊的賜物をもっと大胆に働かせていくかを学ぶことができたフォーラム (公開討論の場) であっ

た。その集会は、靈的やさしさをもって落ち込んでいる兄弟姉妹を回復させるのに手助けした。清教徒は、恵みを体験してきたすべての者が他者のために静かにまた大声で祈らねばならないことを主張した。」

清教徒運動と同様に敬虔派 (Pietism) は、信徒運動とその小集団活動両方を経験することによって大きく前進していったのである。敬虔派の運動は、十七世紀末ドイツにおけるルター派教会内に起こった。この運動は、個人の生活における献身と信仰の実践を強調した。コレジア・パイエタティス (Collegia pietatis) と呼ばれた小集団活動は聖書研究のためにあり、この運動の核となった。シュペーナー (Spener) が敬虔派の創立者である。原則として、小集団であるコレジア・パイエタティスは、一六七〇年から一六八二年にかけて、シュペーナーの家で月曜と木曜日に開かれた。説教やその聖書に関する討論に加えて、その集会では祈りや靈的な書物の朗読、追加的な聖書の他の箇所

の学びも含んでいた。コレジア・パイエタティスはまた、礼拝、教育、フェローシップ、相互啓発のための機会を備えていた。敬虔派はまた、信徒運動によって前進した。プロエシュ (Donald G. Bloesch) は、万人祭司制は宗教改革の神学での卓越した位置を占めていたが、敬虔派において具体的に具現化された、と語っている。信徒運動は、この派によって弾みを得た。敬虔派の影響は、ハレ (Halle) のみに限定されていたのではなかった。この派がその最も恒久的な影響力を持ち続けたのはワルテンベルグ (Warttemberg) においてだった。南ドイツでは、敬虔派は民衆の運動 (A people movement) にもなった。

シュペーナーの弟子であるフランケ (Fronke) によって影響された人で、信徒による世界宣教を目指した人物が、ラビア派 (Moravians) の指導者であるツィンツェンドルフ (Zinzendorf) であった。聖書研究のグループであるコレジア・パイエタティス (Collegia pietatis) は、ツィンツェンドルフによって、バンド (band)、方式に採用され発展していった。彼は、ヘルンフット (Herrnhut) の全共同体をバンドと呼ばれる小集団に分けたのだ。このバンドは、二、三人かそれ以上からなる靈的な交わりで、分かち合い、勧め、相互の教育、祈りのためにともに集まった。各バンドごとに一人の長が立てられた。これらのバンドは、伝道の根拠地となったのである。モラビア派のバンドの集会は、敬虔派のコレジア・パイエタティスの集会よりもっと信徒リーダーの登用を強調した。このように、モラビア派の運動はバンドとその信徒リーダーによる世界宣教の運動であった。ツィンツェンドルフによって発展したバンド方式と信徒運動は、ジョン・ウエズレー (John Wesley) によってさらに拡大し組織化されていった。

サムエル・ミルズ (Samuel Mills) によって推進されたアメリカの学生の信仰復興運動は、信徒運動と小集団活動によって主に発展された運動であった。キース・ヒントン (Keith William Hinton) によると、ミルズは数人の友人学生と一緒に水曜日と土曜日の午後

に祈りを持っていた。今日、韓国ヨイドの純福音中央教会は世界で最大の教会に成長しているが、その急激な成長は区域礼拝 (Cell groups) とそこでの信徒リーダーに負っている。現在約五十三万人の教会員を擁する当教会の牧師、チョウ・ヨンギ師は、区域礼拝活動 (The Cell group activity) が教会成長の重要なかきであると言っている。

アメリカでも今日、ジョン・ウインバー師が導くバインヤード・クリスチャン・フェローシップ教会が信者の家庭での小集団活動と信徒リーダーによって急速に成長してきている。

(2) メソジスト運動の小集団活動とその信徒リーダー養成

1 小集団活動

メソジスト運動は、小集団活動によって大きく前進した。この運動は二種類の小集団活動からなっている。クラスの集会 (The class meeting) とバンドの集会 (The band meeting) の二つである。前者は組会として訳されている。まずこの前者のクラスのメソジスト活動から見ていきたい。

メソジスト運動の原動力は、クラス集会のような小集団活動の結果である。クラスでは、メンバーのために健康面、社会面、教育面、霊的な面の改善がなされ、十八世紀末まで続いた。クラスは、教育の場としても、リーダー養成の場としても用いられた。この小集団は、経済面でもメソジスト運動を支えたのだった。このクラスのメソジスト活動は、全会員を伝道牧会に動員する上でも良い機関であった。クラスはまた、新来者が会員に加わりうとする場合の媒介として貢献した。クラスは通常、一件の家ごとに一週に一度夕方に約一時間持たれた。そこでは、霊的な成長をチエックし、特別な問題や必要を報告し、互いに祈り支え合った。クラスの集会はバンドの集会によって支えられていた。バンドは均質群のグループ分け (Homogeneous groupings) であった。クラスとは対照的に、バンドは性や未婚既婚の状態によって分けられていた。既婚の男性、既婚の女性、单身男性、单身女性という四つのグループ分けからなっていた。バンドは、四、五人くらいから十人以下で構成されていた。バンドは細胞分裂のようにして増加していった。これらの小集団は自主的に参加するグループだった。バンドは告白、赦免、分かち合い、祈りのための機会を備えていた。バンドは少なくとも一週に一回持たれ、その会員は特別な理由がない限り時間を厳守して約束の時に達して来た。その集会は、讚美と祈りをもって定められた時間に正確に開かれた。参加者は、自由にはつきりと彼らの霊的状态を語った。参加者のニーズにあった祈りがどの集会後にも持たれた。バンドは非常に重要なものと考えられていたので、メソジスト社会の「神経」と呼ばれていた。メソジスト教会の存続は、バンドの成功に直接的に関係があると信じられていた。

2 信徒リーダー訓練

メソジスト運動は信徒運動であった。ジョン・ウエスレーは、信徒にリーダーシップと説教の多くの機会を提供したのだった。ウエスレーと数人の気の合った牧師を除いて、巡回信徒説教者 (The itinerant preachers)、地域信徒説教者 (The local lay preachers)、クラスの指導者である多くの信徒リーダー、事務主事 (Stewards) などとはみんな信徒たちだった。バンドは、クラスがクラスリーダーを持ったようにバンドリーダーを持たなかった。バンドの集会は、全員によって分かち合われたリーダーシップでもってより民主的になされた。クラスのリーダーは、信徒説教者 (The lay preachers) によって選ばれた。信徒説教者は巡回であり、しばしば別の地域に出掛けて行った。信徒説教者と対照的に、クラスのリーダーは同じ地域に止まった。クラスリーダーの選択は、信徒説教者にとって単純な仕事ではなかった。クラスリーダーになるための最初の前提条件は、神の救いの恵みを明確に理解していることである。感情的な安定はまた、信徒説教者によって調べられる特徴の一つであった。

学歴や学力は、クラスリーダーを選ぶ際にさほど重要ではなかった。クラスリーダーの教育レベルは様々であった。ある者は読み書きもできなかったが、ある者は優れた教育を受けていた。信頼性は、救いの恵みを他者に伝えた願望と指導力を持っていることと同様に、信徒リーダーが持っていることが期待されている目だった特質であった。クラスリーダーは、地域や巡回説教者への単なる予備校ではなかった。クラスリーダーは霊的賜物のあかしを示す必要があったのである。

大部分のクラスリーダーは二十歳代であり、ある人々は三十歳代であった。対照的に、三十歳過ぎてからクラスリーダーになる者はほんのわずかであった。ヤングパワーは、メソジスト運動を支えていたのだった。この運動が若者

にある魅力を与えていたことは明らかである。ジョン・ウエスレーにとって重要であった従順の特質は、年配者よりも若者に比較的容易に現れたのかもしれない。上記以外にジョン・ウエスレーが強調した要素は、単なる「能力 (Ability)、ゆりも、有用性 (Availability)、であったと言われる。クラスリーダーはまた、ある訓練を受けた後でなければ、また監督の下におかなければ仕事を割り当てられなかった。」

クラスリーダーの第一の仕事は、人々の霊的祝福を見守ることであった。クラスリーダーはまさに副牧師のような機能を果たしていたのだった。

信徒説教者を訓練する五つの異なった方法を見てみたい。ガロー (James L. Garlow) は次のように述べている。
「* 神学問題を議論することに加えて、毎年開かれる会議が信徒ミニストリーの実際的な関心事のための効果的な訓練センターとなったのだった。

* 規則が訓練の手段として用いられた。

* 信徒説教者のための模範としてウエスレーの伝道牧会に示された実演、委任または派遣、そして監督のやり方を
使用することだった。

* リーダーが作られる一過程としてのリバイバルそれ自体の力を体験することであった。

* メソジスト運動を特徴づける小集団または細胞集団の使用を通してなされた。」

信徒説教者を訓練する方法として小集団の使用に関しては、ガローは次のように説明している。

「小集団は、交わりを強化するのを助けるとともに、信徒が自分に割り当てられた重要なミニストリーを継続できるように訓練の場としても仕えてきた。信徒がミニストリーの準備のために整えていくことができるためのチャンネルとしてもあるこのメソジストの細胞グループは、多分メソジスト運動の中で最も強力なものであった。」

ウエスレーは、信徒説教者が模倣式モデル (An imitation model) としてウエスレーから学ぶことができるように、信徒説教者と通常いっしょに旅をしたのだった。ウエスレーの訓練の焦点は、成人の訓練に置かれていたと見よう。

このように、メソジスト運動の信徒運動は、以上こぼれたような信徒訓練によって発展したのだった。

結 び

教会が成長する上で、小集団活動とその信徒リーダー養成が重要であることを、聖書や歴史を通して見てきた。

伝道は聖書の言葉の宣言 (kerygma) だけでなく、教会のコイノニア (koinonia) の形成もまた必要である。イエスやパウロの伝道でも、言葉の伝達だけでなく、小集団の形成を通して伝道を押し進めていった。伝道を目的とした小集団活動を訓練された信徒リーダーが担っていけば、小集団の細胞分裂的倍加によって全組織は拡大し、大集団に成長していく。

従来、聖職者と平信徒という区別がなされてきたが、これは聖書的ではない。すべてのクリスチャンは神の民であり、神のミニスターである。神の民全体が証し人となり働き人となっていく、多くの聖徒が小集団のリーダーとして訓練されていくなら、信徒運動が起っていくに違いない。

また初代教会では、使徒たちが強力なリーダーシップを持って、聖徒を整えミニストリーの働きへと訓練した。すべての神の民はミニスターであるが、教会が組織でもある以上訓練するトップリーダーも必要となる。今日、牧師は大胆なビジョンを掲げて強力なリーダーシップをとっていく必要がある。また、すべての信徒はミニスターとして訓

練され、伝道に小集団のリーダーに、開拓伝道に遣わされることである。牧師の数は限られている。牧師が訓練する側、大ビジョンを設定し指揮していく側となり、すべての信徒が従順なミニスターとして仕え、小集団を伝道の第一線として用いていくなら、爆発的な教会の成長を見るであろう。

実際、キリスト教史の偉大な信仰復興運動は、トップリーダーの強力なリーダーシップとともに、信徒リーダーに導かれた小集団による細胞分裂的倍加による大集団への拡大運動であった。初期の修道院運動、清教徒運動、敬虔派の運動、モラビア派の運動、メソジスト運動、アメリカの学生信仰復興運動、現代の韓国やアメリカの教会成長運動などには、信徒運動と信徒リーダーに導かれた小集団活動の貢献を見ることが出来る。もちろん、これらの多くの運動は、大いなる幻と強力なリーダーシップを持ったトップリーダーの存在も抜きにできない。

信徒リーダー養成の手段としては、模倣式モデル (Imitation models) と徒弟式モデル (An apprenticeship model) が有効である。トップリーダーであり訓練者である牧師は、一部の従順な弟子を身近に置いて模倣式モデルや徒弟式モデルで訓練していく。やがて訓練された弟子たちが、他の従順な信徒を身近に置いて牧師がやった同じやり方で訓練していく。そして、そのまた信徒も同じように弟子を訓練していくのである。小集団のリーダー養成もこのアプローチが適用できる。これは、日本に昔からある親分子分の関係を通したねずみ講式弟子訓練方法に似通っている。こうして信徒全体を弟子化する信徒運動が起こっていくのである。

注

- (1) Peter Wagner, *Church Growth and the Whole Gospel* (San Francisco: Harper & Row, Publishers, 1981), p. 94.
- (2) John Mallison, *Building Small Groups in the Christian Community* (West Ryde, Australia: Renewal Publications, 1978), p. 26.
- (3) William V. Cain, *Establishing Small Groups Which Are Communities for Edification and Evangelism at Riverlawn Presbyterian Church*, Unpublished Dissertation, Doctor of Ministry (Pasadena: Fuller Theological Seminary, 1982), p. 119.
- (4) John W. Hurston and Karen L. Hurston, *Caught in the Web* (CA: Church Growth International, 1977), p. 27.
- (5) William R. Mourer, *A Theology of Small Group Ministry in the Life of the Local Church*, Unpublished paper (Pasadena: Fuller Theological Seminary, 1982), p. 16.
- (6) *Ibid.*, p. 14.
- (7) Wagner, *Ibid.*, p. 173.
- (8) Sheldon Robert White, *A Strategy for Renewal of Congregational Life Through Lay Ministries*, Unpublished dissertation, Doctor of Ministry (Pasadena: Fuller Theological Seminary, 1982), pp. 26-29.
- (9) Abraham Philip, *Mobilization of the Laity in the Mar Thoma Church for Evangelism*, Unpublished dissertation, Doctor of Missiology (Pasadena: School of World Mission, Fuller Theological Seminary, 1974), p. 132.
- (10) Peter Wagner, *Leading Your Church to Growth* (Ventura, CA: A Division of GL Publications, 1984), p. 136.
- (11) Howard A. Snyder, *The Community of the King* (Downers Grove, Illinois: Inter-Varsity Press, 1977), p. 93.
- (12) Robert Clinton, *Leadership Training Models* (Pasadena: Fuller Theological Seminary, 1983), p. 168.
- (13) *Ibid.*, p. 14.
- (14) Clarence Kim-seng Lim, *Leadership Development: Implications for Singapore Methodism*, Unpublished dissertation, Doctor of Missiology (Pasadena: School of World Mission, Fuller Theological Seminary, 1983), p. 31.
- (15) Hironari Takatori, *The Small Group Its Biblical Foundation and Application in the Context of Church Growth*, Unpublished thesis, M. A. in Missiology (Mississippi: Reformed Theological Seminary, 1983), p. 43.
- (16) *Ibid.*, p. 45.
- (17) *Ibid.*, p. 44.
- (18) Charles E. Hambrick-Stowe, *The Practice of Piety: Puritan Devotional Disciplines in Seven-Teenth Century New York*, Unpublished dissertation, Ph. D. (Massachusetts: Boston University Graduate School, 1980), p. 231.

- 81 Ibid., p. 23.⁴
- 82 Takatori, Ibid., p. 47.
- 83 Pale W. Brown, *Understanding Pietism* (Grand Rapid, Michigan : William B. Eerdmans P. C., 1978), pp. 60-61.
- 84 Donald G. Bloesh, *The Evangelical Renaissance* (Grand Rapid, Michigan : William B. Eerdmans P. C., 1973), p. 118.
- 85 Ibid.
- 86 Brown, Ibid., p. 157.
- 87 Takatori, Ibid., p. 48.
- 88 A. J. Lewis, *Zinzendorf the Eccumenical Pioneer* (Philadelphia : The Westminster Press, 1962), p. 67.
- 89 Keith William Hinton, *An Analytical Study of the Dynamics of Spiritual Renewal*, Unpublished dissertation, Doctor of Missiology (Pasadena : School of World Mission, Fuller Theological Seminary, 1984), p. 222.
- 90 Lim, Ibid., pp. 51-52.
- 91 Ibid., pp. 52-53.
- 92 Howard A. Snyder. *The Radical Wesley and Patterns for Church Renewal* (Downers Grove, Illinois : Inter-Varsity Press, 1980), p. 54.
- 93 James L. Garlow, *John Wesley's Understanding of the Laity as Demonstrated by His Use of the Lay Preachers*, Unpublished Dissertation, Ph. D. (NT : Drew University, 1979), p. 206.
- 94 Lim, Ibid., p. 53.
- 95 Snyder, Ibid., 1980, p. 59.
- 96 Garlow, Ibid., p. 206.
- 97 Ibid., p. 207.
- 98 Ibid., p. 197.
- 99 Ibid., p. 198.
- 100 Ibid.

- 101 Ibid.
- 102 Ibid., p. 199.
- 103 Ibid.
- 104 Ibid.
- 105 Ibid., p. 201.
- 106 Ibid., p. 200.
- 107 Ibid., pp. 268-270.
- 108 Ibid., pp. 271-272.
- 109 Lim, Ibid., p. 68.